

新座市制施行55周年特集

電力王と数寄者、二つの顔伝える 松永安左エ門ゆかりの地



平林寺総門 (提供 金鳳山平林寺)



松永と一子夫人の墓 (提供 金鳳山平林寺)

日本の電力体制の礎を築いた「電力王」にして、「近代三茶人」に数えられる数寄者・松永安左エ門(1875～1971)。新座市内には、松永が眠る平林寺や睡足(すいそく)軒、松永ゆかりの企業などがある。気骨の実業家と趣味人の二つの顔を持つ松永の足跡をたどった。

飛驒の古民家を移築

武蔵野の面影を残す名刹、平林寺。道路を挟んで、睡足軒と呼ばれる古民家が建っている。江戸時代中～後期の飛驒地方(岐阜県北部)の建物で、1938(昭和13)年に松永安左エ門が移築。松永の死後に平林寺が建物と敷地を引き受けた。

大休老師と深い親交

「松永安左エ門著作集」の年譜を見ると、松永はしばしば平林寺を訪れていたことがうかがえる。30(同5)年、近隣の所沢市内に別荘の柳瀬荘を移築し、頻繁に通っていたこともあるが、松永が平林寺を訪れる理由として、松永と親交があった平林寺第21世

峰尾大休老師の存在が大きかった。

松永は平林寺を開山した南北朝時代の僧、石室善玖律師の書を好んだ。38(同13)年、妙心寺の管長も兼務していた大休老師の平林寺への帰山を歓迎する茶会で、松永は石室律師の書を掛けた。新座市教育委員会学芸員の秋山大海さん(33)は「茶道のもとでなしの精神が感じられる」と話す。

年譜には、41(同16)年12月に政治家の近衛文麿を平林寺に迎え、大休老師の案内で、平林寺の松平伊豆守信綱の墓所を参拝した記述がある。この時期に、近衛は松永を大政翼賛会総裁や大蔵大臣に推挙したが、松永は固辞した。45(同20)年12月21日、近衛の葬式が行われた。松永は在りし日をしのび、平林寺を訪れる。「馬に乗って寺前の睡足居(睡足軒)に行き、大休和尚に毛皮のチャンチャン胴着をさし上げる。寺でできた干柿で茶と呼ばれ、また馬に乗って寒山の道を帰る。淡らぐ夕日、送る来る鐘の音、虎山公(近衛のこと)を送る夕にはふさはしい風情であった」(「松永安左エ門著作集 第6巻」より)。

引き継がれる経営理念

その一方で、松永の実業家としての顔を伝えるのがサン

ケン電気だ。母体となったのは、松永が東邦電力50周年事業の一環で設立した東邦産業研究所。39(同14)年に新設されることになった東京研究所で研究員を務めていたのが、のちにサンケン電気を創業する小谷鎮治だ。

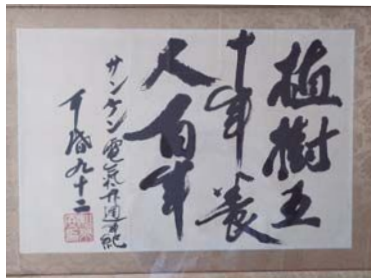
同社の社史「サンケンの歩み―半導体と共に―」によると、日本の敗戦後、「日本を農業国に」という連合国の意向を受け、同研究所を解体して農工学園に切り替えることになったという。

それに対し、小谷の考えは違った。「日本を再建するには工業に頼らざるを得ない。自分が今まで手掛けてきた半導体によって再建に寄与したい」。小谷は松永を訪ねて自分の考えを述べ、全面的な賛意を得たという。小谷は東邦産業研究所事業部を設立したのち、46(同21)年に東邦産研電気株式会社(のちにサンケン電気(社名変更))を創業した。

同社には、創立10、15、20周年に松永が揮ごうした書が残っている。10周年の時は「文明世界 人間怠慢を許さず」、20周年では「植樹五十年 養人百年」。気骨の人、そして人材育成の大切さを知っていた松永らしい言葉だ。同社総務課長の古屋真さん(54)は「技術ファーストという松永さんや創業者から始まった哲学は、経営理念とし



睡足軒の森 (提供 金鳳山平林寺)



松永の揮毫「植樹五十年 養人百年」 (提供 サンケン電気)

て今も引き継がれている」と話していた。

新座市立歴史民俗資料館(れきしてらす)では「松永安左エ門生誕150周年記念」展を11月1日～12月27日

電力体制の基盤築く

松永安左エ門は1875(明治8)年、長崎県豊後(現大分県)に生まれ、慶応義塾で福沢諭吉に学んだ。鉄道事業の成功を経て、電力事業へ進出。社長を務めた東邦電力は主に九州や中京地区に電力を供給し、5大電力の一つに数えられた。各地の電力会社も傘下に収め、「電力王」と称された。しかし、昭和に入って戦時体制が強化されると、電力の国家管理が画策されていく。松永は「民間会社の自由競争なくして日本の発展はない」と猛反対するが、流れを止めることはできなかった。1942(昭和17)年に民営電力会社を統合した国営電力が設立されると、松永は東邦電力

60歳から茶道、近代三茶人に

松永安左エ門は松永耳庵(じあん)の号で茶道をたしなみ、近代三茶人にも数えられている。始めたのは60歳からだだったが、益田鈍翁や原三溪の影響を受けて心血を注いだ。大井戸茶碗の「有楽」を、鈍翁を出し抜いて破格の値で



大井戸茶碗 有楽井戸 (出典: ColBase)

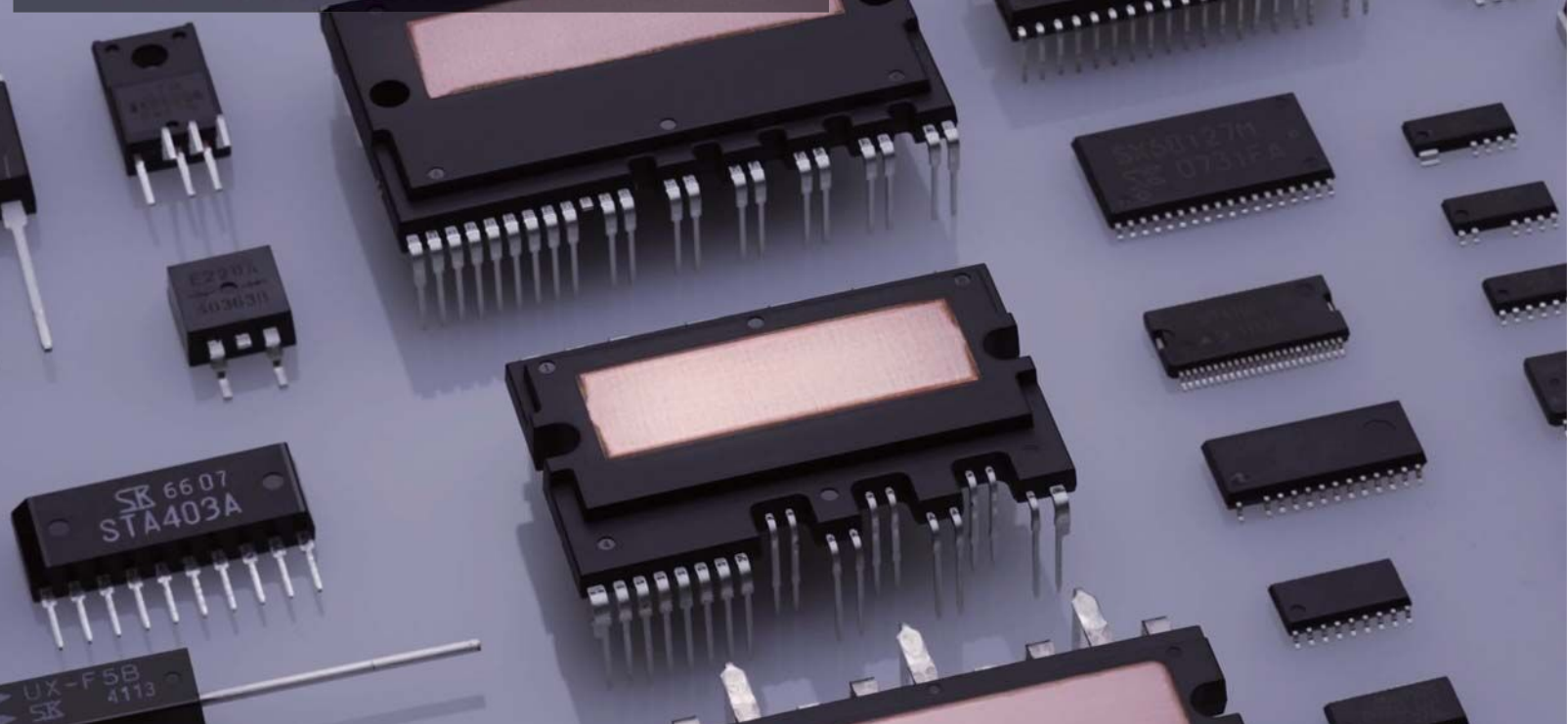
昭和12年、14万6千円余り当時大卒の切手給50円程度という高価なもので買入れ、松永耳庵の名を二筆署名にした茶碗として知られている。

手に入れるなど、茶器や美術品の収集でも名を馳せた。松永が戦前、戦中に数寄者として茶の湯に打ち込んだ場所が、所沢市坂之下にある柳瀬荘(黄林閣)だ。江戸時代天保期に東京都東久留米市の豪農が建てた民家を、1930(昭和5)年に移築。別荘として使っていた。その後、周辺に古民家を次々と移築して茶室とし、政財界の要人らを招いて茶会を開いた。戦時中、松永は柳瀬荘に隠遁し、茶の湯さんまの日々を送る。終戦後、神奈川県小田原市に転居し、柳瀬荘と古美術品を東京国立博物館に寄付した。

国の重要文化財にも指定されている柳瀬荘は、毎週木曜日に公開されている。問い合わせは、柳瀬荘(Tel.04・2944・2009)へ。

技術で未来に革新を

～パワー半導体で切り拓く世界の省エネ～



サンケン電気の半導体製品は、多様なIC製品(パワーマネジメントIC、モータドライバ、デジタル制御ICなど)や、ディスクリートなどのパワー半導体製品、また車載用途に対応したものもあります。高効率なパワーデバイスや、独自の回路技術を取り入れたIC製品で、小型で高効率な電子機器を実現しています。これからも、健やかに安全な暮らしに貢献できる製品を提供してまいります。

新座市制施行55周年おめでとうございます

サンケン電気のDNA

旧東邦電力の社長であった故・松永安左エ門氏により、科学的試験研究機関「財団法人東邦産業研究所」が1937年に創設されました。同研究所の半導体研究室主任の故小谷鎮治氏は、終戦後解散となった同研究所の技術者と設備を継承し1946年に「東邦産研電気株式会社」を設立。その後1962年に現社名である「サンケン電気株式会社」に社名変更し現在に至っています。

サンケン電気に保管されている松永翁の揮毫



「文明世界不許人間怠慢(文明世界人間の怠慢を許さず)三十二年 秋ノ日 耳庵老叟」



サンケン電気株式会社 埼玉県新座市北野3-6-3



公式HP



公式X



公式YouTube